

令和 2 年度
興南高等学校
入学試験問題

後 期

国 語

令和 2 年 3 月 14 日 (土) 実施 50 分 / 100 点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は50分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、中学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。

【一】次の文章は、筆者である内田樹が村上龍のエッセイの一部を引用する箇所から始まる。文章を全て読んで、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。

フリーターと呼ばれる人たちがいる。フリーターという言葉ができてから、就職しないでアルバイトをしながらチャンスを待つ、という若い人たちはおそらく増えたのだろうと思う。^{※1}援助交際などもそうだったが、便利な言葉はあつという間に流通し、しっかりと定着する。

①フリーターという便利な言葉がなかったころは、就職しないでアルバイトをすることに後ろめたさがあった。誤解されると困るが、私は就職しない人たちをヒナン^aしようと思っ^aているわけではない。就職は絶対ではない。チャンスを待つことも選択肢の一つだろう。ただし、それはその人に何か専門的な技術か知識がある場合だ。

「好きなことが見つかるまで、こうやってフリーターをやりながら、チャンスを待つつもりです」
と言うようなフリーターにはきつと専門的な知識や技術がないのだろう。

〈中略〉

だが考えるとすぐにわかることだが、二十歳を過ぎて、好きなことが見つからないと学校にも行かず、これといって訓練も受けていない人間に、どういうチャンスが訪れるというのだろうか。そういう人が二十五歳になって、たとえば自分の好きなことが医学だったと分かったとき、その時点で勉強を始めても極めて大きいハンディを背負うことになる。

残念ながらほとんどのフリーターには未来はない、というアナウンスがないのはどうしてなのだろうか。

（村上龍 『アウエーで戦うために』 光文社 二〇〇〇年）

私はこの村上の意見におおむね賛成である。

「A」、言葉を言い添えておくと、経験的に言つて、職業選択というのは「好きなことをやる」のではなく、「できないこと」やりたくないこと」を消去していった果てに「残ったことをやる」ものだとは考えている。

つまり、はたから見て「好きなことをやっている」ように見える人間は、「好きなこと」がはっきりしている人間ではなく、「嫌いなこと」「できないこと」がはっきりしている人間なのである。

人間が何かを「やりたくない」「できない」という場合、自分にそれを納得させるためには、そのような**倦厭※うけん**のあり方、不能の構造をきちんと言語化することが必要だ。

「やりたくないこと」の言語化はむずかしい（「できないこと」の言語化はもっとむずかしい）。

「だって、たるいじゃんか」とか「きれーなんだよ、きれーなの。そゆの」とか言っていると一生バカのまままで終わってしまう。

自分がなぜ、ある種の社会的活動について、嫌悪や脱力感を感じるか、ということと丁寧な言葉にしてゆく作業は自分の「個性」の輪郭りんかくを知るためのほとんど唯一の、きわめて有効な方法である（「ほとんど唯一の」というのは、もう一つ方法があるからなのであるが、これは「死ぬ前」にならないと分からない）。

人は「好きなもの」について語るときよりも、「嫌いなもの」について語るときの方が**雄弁②**になる。そのときこそ、自分について語る精密な語彙いを**カクトクb**するチャンスである。

だから、「だっせー」とか「くっせー」とか「さぶー」とかいう単純な語彙でおのれの嫌悪を語ってすませることが出来る人間には、そもそもおのれの「個性」についての意識が希薄なのである。「B」、そのような人間が「好きなこと」を見出して、個性を実現する、というようなことは百パーセント起こりえないのである。

「二十歳を過ぎて、好きなことが見つからないと学校にも行かず、これといって訓練も受けていない人間に、どういうチャンスが訪れるというのだろうか」という村上の疑問は私にも「C」されていく。

「学校に行く」ことがどれほど専門的知識と技術の習得に役立つか、教師として、いまひとつ自信がないが「訓練を受ける」ということ③の大事さは骨身に染みている。それは「自分でできないことを言語化する」ことを要求するからである。

「訓練を受ける」というのは、ある情報とスキルの習得のために、限定的な場面で、限定的な期間ではあるが、見知らぬ人間に対して、「百パーセントの恭順」※おかしな表現という構えをとることを意味する。「他者に百パーセントの恭順をもって臨む」という経験の意義は、その訓練を通じてカクタクされる情報やスキルの「内容」よりもずっと重い。

私たちはほとんど無防備に見知らぬ人間に自分の心身を委ねるのである。これは容易ならざることである。うかつに変な「尊師」みたいなものにつかまったら、そのまま地獄落ちである。

「訓練を受ける」ということは、「まだ訓練を受けていない段階」であるにも関わらず、自分が受けようとしている訓練について、「どの師、どのシステムがもっとも優れているか」判定しなくてはいけない、ということの意味している。

自分がまだ習っていないことについて、自分ができないことについて、何も知らない段階で、「誰が師事するに足る人であり、誰が師として不適當であるか」を見切らなくてはならないのである（それが「おのれの不能を言語化する」ということの一つの実践的なかたちである）。

「十分なデータがないところで死活的に重要な決定をする」というのが「訓練を受ける」ということの最初の、そして一番重い意味である。

「十分なデータ」があれば、誰だって正しい決定ができる（できない人もいるが）。「十分なデータ」がないのに、選択しなければな

らないとき、私たちの五感は非日常的に敏感になる。わずかな情報の断片から、私たちがその一部にしかアクセスできない「もの」のクオリティと深みを探り当てるのである。

そのような五感の錬磨を「訓練を受ける」という動作は前提にしているのである。適当に「訓練を受けて」みたあとで、「あ、おれ、これぜんぜん向いてなかったわ」などとへらへらできる人間は致命的に感覚が鈍いのであるから、それからあと、どのような「学校」へ通おうとも、どのような「訓練」を受けようとも、決してプロフェッショナルになることはできないのである。

「ほとんどのフリーターに未来はない」と私も思う。

それは「D」の責任ではない。

自分が「何を嫌いか」「何ができないのか」をきちんと言語化することを怠った人間の、「限定的なデータ」から優れたシステムとそうでないシステムを判別することのできなかった人間の自己責任である。

【語注】

- ※1 援助交際 金銭的援助をする代わりに交際すること
- ※2 倦厭 飽きて嫌になること
- ※3 たるい おっくうであること。だるいこと
- ※4 きれー 嫌いなこと
- ※5 恭順 つつしんで従うこと、心から服従すること
- ※6 死活 死ぬか生きるかということ
- ※7 クオリティ ものの質（しつ）

【内田樹 『子どもは判ってくれない』 文春文庫 ※問題作成の都合上、一部改変】

問一 二重傍線部 a↘e のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直して答えよ。

- a ヒナシンしようと思っている b カクトクする c 無防備に d 敏感に e 怠った

問二 傍線部①「フリーター」という便利な言葉がなかったころは、就職しないでアルバイトをすることに後ろめたさがあった」とあるが、「フリーター」という便利な言葉ができたことによって、村上はどのような変化があったと述べているか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 数多くのアルバイトを体験しながら、その中で自分の好きな職業を選択しようとする若者が増えた。

イ 急いで就職先を決めようとはせず、好きなことが見つかったから就職しようとする若者が増えた。

ウ 専門的な知識や技術を身につけ、好きや嫌いに関わらずいち早く就職しようとする若者が減った。

エ 好きなことが見つかるまではアルバイトをし、チャンスが来てから就職しようとする若者が減った。

問三 「A」・「B」に当てはまる接続語として最も適当なものを次のア～オからそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ア ただ イ だから ウ ところで エ なぜなら オ あるいは

問四 傍線部②「雄弁に」、④「骨身に染み」の本文中における意味として、最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

問八 次に示すのは、本文を読んだ後に、四人の生徒が職業選択について話し合っている場面である。本文の趣旨と異なる発言を次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 生徒A 今まで自分の好きなものから将来の職業を考えるものだと思っていたけれど、内田樹さんは「できないこと」「やりたくないこと」を排除したあとに「残ったことを行うこと」だと述べていたね。

イ 生徒B 「やりたくないこと」や「できないこと」を、「なんとなくいや」「ださい」などという単純な言葉で表現するのも良くないね。自分がなぜそう思うのか、丁寧に言葉にしていかないといけないんだね。

ウ 生徒C そうだね。後は、とりあえず「訓練を受ける」ことが必要だとも言っていたね。僕は将来何になりたいかは分からないけれど、「訓練を受ける」ことによって五感が鍛えられるから、とりあえず進学して勉強しよう。

エ 生徒D 今までフリーターでも悪くはないと思っていただけ、ただぼんやりとチャンスを待っていてはいけないんだね。自分にとって嫌なことや出来ないことを明確に表現しながら、自分の職業選択を考えていきたいな。

※問題は次に続く

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に記入せよ。

「僕」は、高校生の時にピアノの調律師板鳥に出会った。板鳥の調律は素晴らしく、彼が調律したピアノの音からは、はっきりと景色が浮かんだ。「僕」は、高校を卒業後に生まれ育った山の集落を離れ、調律師養成のための専門学校に通った。専門学校を卒業後は、故郷近くの町へ戻り、憧れていた板鳥の勤める楽器店に調律師として就職した。

※₁ 江藤楽器は、おもにピアノを扱っている。社長の江藤さんはいない。調律師が四名、受付と事務、営業、全部合わせて十名ばかりの小さな店だ。

入社して半年間は店内で業務研修になる。電話の対応に始まり、併設する音楽教室の事務、店頭での楽器の販売、店に来るお客さんへの対応。時間ができると、調律の練習をさせてもらった。

店の一階には、ピアノの並んでいるショールームと、楽譜や書籍を販売しているコーナー、それに、レッスン用の個室が二つと、数十人まで入れる発表会用の小ホールがある。

僕たちが普段いるのは二階の事務所だ。二階は、事務所の他に会議室と応接室がひとつずつ。あとは倉庫として使われている。

店にはピアノが六台あって、それを使っていつでも調律の練習をしていいことになっている。定時までは通常業務で手いっぱいだったから、練習ができるのは夜だけだった。

誰もいない夜の楽器店で、黒いピアノの蓋を開ける。気持ちがあわつと開くのに、芯のところはきゅつと窄るような、なんとも言えない静けさが訪れる。音叉を鳴らす。ぴーんと神経が研ぎ澄まされる。

一弦ずつ、音を合わせていく。合わせても、合わせても、気持ちの中で何かがずれる。音の波をつかまえられない。チューナーで測ると合っているはずの数値が、揺れて聞こえる。調律師に求められるのは、音を合わせる以上のことなのに、まずはそこで足踏み^①をしている。

^② 泳げるはずだと飛び込んだプールで、もがくようなこと。水をかいても、進んでいる実感が無い。夜ごと向き合うピアノの前で、僕は水をかき、小さな泡を吐き、ときどきはプールの底を足で蹴って、少しでも前に進もうとした。

板鳥さんとはなかなか会えなかった。ホールでのコンサート用ピアノの調律もあり、個人宅での指名の依頼も多い。忙しくて、店にいる暇がほとんどない。直行直帰が続いて、一週間に一度も顔を合わせないこともあった。

板鳥さんの調律を見たかった。技術的な指導も受けたかったし、何より、板鳥さんの調律でピアノがどどん音色を澄ませていくのをまた聞きたかった。

その思いが顔に表れていたのだろう。板鳥さんは僕を見かけると、外まわりに出る前の短い間に声をかけてくれることがあった。「焦ってはいけません。こつこつ、こつこつです」

はい、と僕は答える。こつこつ、こつこつ。膨大な^{ぼだい}、気が遠くなるようなこつこつから調律師の仕事はできている。

板鳥さんに気にかけてもらえただけでうれしかった。でも、うれしただけでもなかった。店を出て行くこうとしている板鳥さんを追いかけた。

「こつこつ、どうすればいいんでしょう。どうこつこつするのが正しいんでしょう」
必死だった。「A」僕を板鳥さんは不思議そうに見る。

「この仕事に、正しいかどうかという基準はありません。正しいという言葉には気をつけたほうがいい」

そう言って、自分にうなづくみたいは何度か小刻みに首を動かした。駐車場へ続く通用口のドアを開けながら、

「こつこつと守って、こつこつとヒット・エンド・ランです」

こつこつって野球か。そんなわかりにくい比喻でいいのか。

「ホームランはないんですね」

開けたドアを押さえないが僕は確かめる。板鳥さんはしげしげと僕の顔を眺めた。

「ホームランを狙ってはだめなんです」

わかるような、わからないようなアドバイスだった。「B」には気をつけよう、とだけは思った。

こつこつ、時間をつくっては店のピアノを調律した。一日に一台。六台すべてを調律し終えると、また最初の一台に戻ってピッチを変えて調律し直した。

お客さんのピアノを調律させてもらえるようになるのは早くて半年後からということだった。僕と入れ違いに辞めていった人はさらに時間がかかって、初めてお客さんの家に調律に行けたときには入社して一年半が経っていたそうだ。

僕にそれを教えてくれたのは、七年先輩にあたる柳やなぎさんだ。

「その人もちゃんと調律師の養成学校を出てはいたんだ。向き不向きって、やっぱりあるんだよな」

向き不向きと簡単に言われてしまっては立つ瀨がない④。どんなにがんばっても、向いていない可能性もあるというのが怖い。

「まあ、調律師に大事なものは調律の技術だけじゃないから」

僕の肩をぼんと叩く。

調律の技術に自信がなかった。厳しい学校を卒業したが、やっと基礎を身につけたただけだ。手入れのされていないピアノを前にし

たら、僕にできるのは、いびつな音を並べて、周波数を揃え、なんとか音階として整列させることくらいだ。美しい音には程遠いだろう。その程度のことしかできないということを、誰よりも僕自身が一番よく知っていた。

技術にも自信がないのに、他にも大事なことがあるのでは、まったく手がまわらない。僕の不安を見て取ったのか、柳さんは笑顔で言った。^⑤

「だいじょうぶだって。堂々としていればいいんだ。っていうか、堂々としていたほうがいいんだ。不安そうな調律師なんて誰も信じないからさ」

「すみません」

「いや、謝るところじゃないって。堂々としていればいいんだって」

柳さんは「C」。先輩なのに、ぜんぜん威張ったり偉そうだったりしないのが、とてもありがたい。

小さな共同体で過ごした期間が長い僕は、上下関係というものをよく理解できなかった。上下では表されないはずのものが、上下の力関係にある。たとえば、先輩と後輩。集落と町。先か後か、大きいか小さいか。それだけの違いなのに、上下関係に取り込まれてしまうのが解げせなかつた。

こつこつ調律の練習を繰り返すのは、こつこつピアノ曲集を聴いた。高校を出るまでほとんどクラシック音楽を聴いたことがなかったから、とても新鮮だった。僕はすぐに夢中になって、毎晩モーツァルトやベートーヴェンやショパンを聴きながら眠った。

ひとつの曲をいろんなピアニストが演奏していることさえ知らなくて、どれを選んでいいかもわからなかった。聞き比べる余裕もないので、できるだけ同じピアニストが重ならないよう気をつけて、とにかくたくさん聴くことを自分に課した。^⑥ 卵たまごから孵かえったばかりの雛が最初に見たものを親だと思ひ込むように、僕は最初に聴いた演奏に懐いた。その都度ついで、そのピアニストが一番だと思った。

癖のある演奏も、大きくテンポを変えてしまうような解釈さえも、最初に出会えばそれが僕のスタンダードになった。^{※3}

ほかに何をこつこつすればいいのだろう。時間さえあれば僕はピアノの前に立ち、屋根を開けて内側を覗いた。^{のぞ}八十八の鍵盤が^{けんぱん}あり、それぞれに一本から三本の弦が張られている。鋼の弦はびんとまっすぐに伸び、それを打つハンマーが^{※4}まるでキタコブシの^{つぼみ}蕾のように揃って準備されているのを見るたびに、背筋がすっと伸びた。調和の取れた森は美しい。

【宮下奈都 『羊と鋼の森』 文藝春秋 ※問題作成都合上、一部改変】

【語注】

※1 江藤楽器 「僕」が憧れている板鳥の勤める楽器店、現在の「僕」の職場

※2 音叉 楽器や合唱の音合わせなどに使われる道具

※3 スタンダード 基準、標準

※4 キタコブシ 「コブシ」はモクレン科の落葉高木で、蕾や果実が握りこぶしのような形をしていることからこの名がある

問一 傍線部①「足踏みをしている」とあるが、ここでの「足踏み」とはどういうことを指しているか。「〜こと」につながるように本文中より十五字以内で抜き出して答えよ。(句読点も字数に含む)

問二 傍線部②「泳げるはずだと飛び込んだプールで、もがくようなこと」とあるが、これは「僕」のどのような状況を表しているか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えよ。

ア 誰もいない夜の楽器店で理想とする調律が出来るようになると思っていて練習をしているが、一向に納得のいく調律ができずに苦しんでいる。

イ 誰もいない夜の楽器店で一人仕方なく調律を練習するが一晚でできる数ではないと感じ、調律を手伝ってくれない先輩たちを恨んでいる。

ウ 誰もいない夜の楽器店で練習すれば自分の目指す調律が出来ると考えていたのに、いつまで経っても調律ができない自分に絶望している。

エ 誰もいない夜の楽器店は静かで調律の練習する環境として最適だと思っていたが、いつも通りの調律ができずにいらだっている。

問三 「A」に入る慣用句として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 口が減らない

イ 目を細める

ウ 耳に逆らっている

エ 息を切らせている

オ 眉をひそめている

問四 傍線部③「しげしげと」、④「立つ瀬がない」のここでの意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

③ 「しげしげと」

ア きよとんと見つめる

イ 何気なく見つめる

ウ ふいに見つめる

エ じっと見つめる

2 この部分は何のようなことを述べているか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 高校卒業後にクラシック音楽を聴き始めた「僕」は、モーツァルトやベートーヴェン、ショパンの曲に惹かれ、彼らの作った音楽だけが価値あるものだと思ひこんだということ。

イ 高校卒業後にクラシック音楽を聴き始めた「僕」は、クラシック音楽になかなか親しむことが出来ず、かつて聞いていた流行りの音楽だけを聞きたいと思ひなおしたということ。

ウ 高校卒業後にクラシック音楽を聴き始めた「僕」は、初めて聴いたピアニストの演奏だけが絶対的な評価の基準になると考え、他の人が演奏しても物足りなく感じるということ。

エ 高校卒業後にクラシック音楽を聴き始めた「僕」は、演奏の出来に関わらず、曲を初めて聴く際に演奏していたピアニストの演奏に親しむ、最高基準だと思ひつていたということ。

問九 本文の内容として適当なものを次のア～エから二つ選び、それぞれ記号で答えよ。ただし解答の順番は問わない。

ア ピアノの調律をするときには絶対音感が必要であり、調律師を志す全ての者はクラシック音楽を多く聴かねばならない。

イ ピアノの調律にはどのピアニストがどのように演奏しているかを把握しなければならぬため、曲を多く聴く必要がある。

ウ ピアノの調律師には美しい音色を出すことだけでなく、調律の技術や、堂々として客を不安にさせないことも大切である。

エ ピアノの調律は地道な努力を重ねることに加え、時には上下関係を大切にし、先輩の言葉に従って励んでいく必要がある。

オ ピアノの調律は一気に要領を得て上達するものではなく、ひたすら繰り返し練習を行い少しずつ上達していくものである。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧記入せよ。

①ながつき※1ばかり、夜一夜降りあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日いとけ※2ざやかにさし出でたるに、前栽※2の露がこぼるばかりぬれかかりたるも、いとをかし※3。透垣※3の羅文や、軒の上に、かいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、雨※4のかかりたるが、白※5き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじう※6 あはれにをかしけれ。

すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなるに、露※7の落つるに枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふとかみざまへあがりたるも、いみじうをかしといひたることども※8、人の心にはつゆをかしからじとおもふこそ、またをかしけれ※9。

【『枕草子』一三〇段（岩波文庫版） ※問題作成の都合上、一部改変】

【語注】

- ※1 ばかり 時期や頃合
- ※2 前栽 庭先に植えた草木
- ※3 透垣 板や竹で作った垣根
- ※4 羅文 透垣の上部にひし形に組んだ飾り
- ※5 かいたる かけ渡した
- ※6 つゆをかしからじ すこしもおもしろくあるまい

問一 二重傍線部 a、c を現代仮名遣いに改めよ。

問二 傍線部①「ながつき」について以下の各問いに答えよ。

1 何月のことを表すか、漢数字のみで答えよ。

2 「三月」の異名を漢字で答えよ。

問三 傍線部②「けざやかに」、③「をかし」、⑥「あはれに」について以下の各問いに答えよ。

1 ここでの意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

②「けざやかに」

ア 安全に

イ 穏やかに

ウ 鮮やかに

エ 的確に

⑥「あはれに」

ア 楽しそうに

イ はかなく

ウ はなばなしく

エ しみじみと

2 傍線部③「をかし」、⑥「あはれに」と感じているのは誰か。漢字四字で答えよ。

問四 傍線部④、⑦、⑨、⑩の「の」の中で、他と異なる用法の「の」を一つ選び、④・⑦・⑨・⑩の記号で答えよ。

問五 傍線部⑤「白き玉をつらぬきたる」とあるが、どういうことを描写しているか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号

で答えよ。

- ア 露（水滴）が蜘蛛の巣についている様子が、糸で貫いた真珠のように輝いているということ。
イ 白日（太陽）が蜘蛛の巣に差し込む様子が、糸の白さで際立ち輝きを放っているということ。
ウ 透垣や軒の上にかかっている蜘蛛の巣（の白色）が、暗部と対照的に映えているということ。
エ 露や蜘蛛の巣を白昼（昼間）に見てみると、朝と同じ状態で全く変化していないということ。

問六 傍線部⑧「いみじうをかし」とあるが、何に對して「をかし」と述べているか。最も適當なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 濡れて重たそうな萩が、露の落ちるのに合わせて、触れてもいないのにはね上がることに。
イ 濡れて重たそうな萩が、時折吹く風にあおられて、手を挙げるように動いたりすること。
ウ 秋をむかえて多く茂った萩が、雨に打たれてしおれていたが、自然に元に戻ったこと。
エ 秋をむかえて多く茂った萩が、雨に濡れ風情が増したが、他人は気づいていないこと。

問七 傍線部⑩「をかしけれ」の活用形を次のア～カから選び、記号で答えよ。

- ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形 エ 連体形 オ 已然形 カ 命令形

問八 本文の趣旨として最も適當なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 一晚中雨が降った翌朝の庭の植え込みの様子は、露が輝いて見え、最も風情があるといえる。
- イ 蜘蛛の巣が雨に打たれても破れずに残っていることや、巣から水滴が垂れているのは面白い。
- ウ 草木の枝などが雨に濡れて重そうに垂れているのは風情があり、人はつい手に取りたくなる。
- エ 私が「をかし」と思っていることを、他人は全くそうではないと思っていることが面白い。

問九 この文章のジャンル（文章の種類）を次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア 俳諧紀行文

イ 随筆

ウ 物語（作り物語）

エ 軍記物語